

## 〈研究ノート〉

# 『今昔物語集』天竺部を仏伝として読むために

柏木寧子

### はじめに

本稿は、『今昔物語集』天竺部五巻を「仏」に関する一思想テクストとして読むための資料である。

『今昔物語集』天竺部は「和文現存最古の組織的な仏伝」\*<sup>1</sup>であり、出生から入滅に至る生涯（巻第一～巻第三）のみならず、入滅以後（巻第四）、過去生（巻第五）も含め、釈迦仏出現という一回的出来事の全体を描いている。続く震旦部五巻・本朝部二十一巻は、釈迦仏の説いた法がこの世界にあまねく伝わる諸過程であり、また、その法に照らされた一切衆生が現し出す生存の諸様相である。いわば、説話集成立当時の人々にとっての全世界が、釈迦仏という一仏の教化する範囲として一瞬のうちに観て取られている。教説の学問や修行の実践によってでなく、物語の制作を通じて仏という存在の捉え返しを図っているのが『今昔物語集』であるといえる。では、天竺部五巻はどのような仏を描いているのか、仏とはどのような存在であるとそこでは理解されているのか。

『今昔物語集』の成立事情は未詳だが、天竺部諸説話の編纂に際しては『過去現在因果経』『釈迦譜』などの漢訳もしくは中国僧の撰述した仏伝経典、諸経の譬喩因縁を抄出・類聚した『衆経要集金藏論』などの類書、さらに、日本僧の撰述した散逸因縁集も踏まえられたであろうことが想定されている\*<sup>2</sup>。編纂者が参照したであろうテクストはもとより、参照しなかったであろうテクストも含め、さまざまな仏伝テクストとの比較対照を通じて『今昔物語集』の内容・構成上の傾向を知り得るならば、その特質を考える手がかりとなるだろう。

すでに『釈迦譜』と『今昔物語集』各説話との関係をめぐっては、本田義憲による研究があり\*<sup>3</sup>、仏伝経典のみならず、説経と関わりの深い『東大寺諷誦文稿』や中世の説話集・仏伝物語など、日本の諸テクストも採り上げた比較研究を黒部通善が行っている\*<sup>4</sup>。本稿においてはまず、仏伝とはそもそもどのような種類のテクストであり、具体的にどのような現存テクストがあるかを整理する（§1）。そのうえで、仏伝が仏の何をどのように描くのか、『今昔物語集』

ほかいくつかのテキストにおける載録挿話を一覧し、主要挿話をめぐる叙述の対照を試みる。

## § 1. 仏伝とは何か

### (1) 釈迦仏という問いと手がかり

『今昔物語集』天竺部を仏伝として読むとは、全百八十七説話から成る五巻全体を、釈迦仏理解の一テキストとして見る、ということである。いいかえれば、釈迦仏とはどういう人であったか、人としての釈迦仏をめぐる問いと応答がそこに展開されているテキストとして全体を読む、ということである。

釈迦仏とはどういう人であったか、あるいはそもそも仏とは何ものか、という問いは、現在のわれわれが問う場合にも決して問いやすい問いではない。釈迦仏は現存せず、また釈迦仏の滅後、およそ仏とよばれる者の出現はなく、眼で見、耳で聞き、実地に確かめ知ることはできない。もちろん、仏という語の由来をたどり、サンスクリット語の buddha の音写であることや、元来（真実）目覚めた人、（真実を）悟った人を表す一般名詞であったことを知ることはできる。また、仏教史を少し振り返るならば、ゴータマ・シッダッタ（ガウタマ・シッダールタ）が出家・修行を経て法（真実）を悟り、釈迦仏と呼ばれる仏と成ったこと、のち、その弟子たちもまた悟りを得るようになると、弟子たちの悟り（阿羅漢の悟り）に対し、師である釈迦の悟りを特別な高みに位置づけ、仏という語の固有名詞化が生じたこと、そしてさらにのち、たとい特別な高みに位置づけられるべきであるにせよ、あくまでも仏の悟りが全修行者共通の目的であるとする人々が現れ、仏という語の再度の一般名詞化が生じたこと、など語の変遷を知ることができる。また、釈迦仏の悟った法（真実）が普遍であるなら、それを悟る人はほかにも存在し得る道理であることから、時空の彼方に過去仏・未来仏・十方他土仏といった諸仏が想定されるようになったこと、など語の展開についても理解することができる。しかし、辞書的記述の周辺をいくらめぐっても、例えば、仏に成るということ、仏であるということがどういうことであるのか、ゴータマ・シッダッタはどういう人であり、なぜまたどのようにして仏に成ったのか、仏として生きることはゴータマ自身と周りの人々にとってどういうことであったのか、といった問いに近づくことはできない。

釈迦仏の言行を知ろうとするとき、主な手がかりとなるのは、仏の周辺あるいは後世の人々によって制作された「仏伝」と総称される諸テキストである。歴史上実在した唯一の仏、釈迦仏をめぐるっては少なからぬ仏伝が制作・伝承さ

れてきたが、仏伝から何を知り得るのか、制作・伝承者がそこに描いたのは何だったのか、という点については、注意を要する。釈迦仏自身は生涯著述を残さず、傍らの弟子たちもまた、釈迦仏生前にその言行を記録することはなかった。仏の言行は当初口承で弟子たちの間に伝えられ、滅後数百年経過した紀元前後、ようやく書承で伝えられるようになった。すでにその時点で記憶違い、言い間違い、聞き間違い、書き違い等が生じたおそれはあるし、仏の言行は諸部派が各々編纂・伝承する経や律のところどころに組み込まれる形で記録されたため、部派の見解を反映する変容も生じたであろう。経・律に組み込まれていたさまざまな挿話が、出生から入滅まで、あるいは出生前から入滅後まで、年次を追って全体的に叙述されるようになり、体系的仏伝經典が成立するのは、さらに後のことである。仏伝とは一般に、諸部派の経・律に組み込まれた個々の挿話から単立の体系的仏伝經典に至るまで、さまざまなテキスト群の総称だが、その最古のものといえども、仏の言行の史実そのままの記録とは言えない。すべての仏伝テキストの源に何かしら史実の核が存在したことは想定し得るとしても、意図的あるいは非意図的なさまざまな虚構や誇張・訛伝を除去し、純粹な史実を精製抽出すること、いわば‘神話的釈迦仏’の覆いの下での‘歴史的釈迦仏’に到達することは、到底不可能な課題である。

だが、釈迦仏出現はたんに歴史上の一出来事であっただけでなく、思想史上の一出来事でもあったはずである。史実・非史実の混淆した諸仏伝テキストは、思想史的関心をもって見るならば、いずれも読み解かれるべきさまざまな意味に満ちた好個の資料である。仏伝テキストが描く釈迦仏は、‘歴史的釈迦仏’それ自体の素描というより、むしろ‘歴史的釈迦仏’に接した人々が、その上なり彼方なりに、自らの観念の力をもって描いた釈迦仏、‘釈迦仏の観念’であっただろう。それはもしかしたら、‘人々が理解した限りの釈迦仏’として、‘歴史的釈迦仏’を卑小化するものだったかもしれないし、逆に、‘人々がそうあってほしいと願望したところの釈迦仏’として、‘歴史的釈迦仏’以上に偉大なものであったかもしれない。いずれにせよ、仏伝テキストが描く釈迦仏は、史実からどのように逸脱的であったとしても、少なくとも人々の思想の真実として、思想史的関心から読み解かれるべき価値をもつ。一々の仏伝テキストは、先人たちが仏をめぐる問いと格闘した痕跡であり、思想史研究においては、そうした痕跡を踏み、先人の理解に自らの理解を重ねる手続きを経ることなしには、どんな観念の奥行きも深みも解き明かすことはできない。

## (2) 主な仏伝テキスト

仏伝諸テキストの列挙あるいは分類に際しては、例えば、常盤大定『隋天竺三蔵闍那崛多訳**仏本行集経**』**解題**\*<sup>5</sup>、石上善應『**仏所行讚**』序論より「二ブツダ伝説の諸経典」\*<sup>6</sup>、平井宥慶『**太子瑞応本起経**』**解題**より「特論 漢訳仏伝経類の展望」\*<sup>7</sup>、平岡聡「**仏伝からみえる世界**」より「一 仏伝資料」\*<sup>8</sup>などが参考になる。以下、これらを参照しつつ、I. (南方上座部を除く) 諸部派所伝の律に含まれる仏伝、II. 南方上座部所伝の経・律 (パーリ文) に含まれる仏伝、III. 単立の仏伝経典 (漢訳)、IV. 中国において撰述された仏伝、の四項に分類し、主なテキストを列挙する。なお、ゴシックで示したテキストは、次節の載録挿話一覧表で採り上げるテキストである。

### I. (南方上座部を除く) 諸部派所伝の律に含まれる仏伝

- イ) 大衆部説出**世部所伝**『**律蔵**』「マハーヴァストゥ (大事)」; サンスクリット文のみ、漢訳なし。
- ロ) **化地部法蔵部所伝**『**四分律**』「**受戒犍度**」; 410-412年**仏陀耶舎・竺仏念**漢訳。
- ハ) **化地部所伝**『**弥沙塞部和醯五分律**』「**受戒法**」; 422-423年**仏陀什ほか**漢訳。
- ニ) **説一切有部所伝**『**根本説一切有部毘奈耶**』「**破僧事**」「**雜事**」; 703-713年**義浄**漢訳。

### II. 南方上座部所伝の経・律 (パーリ文) に含まれる仏伝

- ホ) 『**相應部**』**經典**「**有傷篇**」中「**梵天相應章**」「**魔相應章**」等。
- ヘ) 『**律蔵**』「**マハーヴァッガ (大品)**」。
- ト) 『**小部**』**經典**「**スッタニパータ**」中「**出家経**」「**精勤経**」「**ナーラカ経**」等。
- チ) 『**中部**』**經典**「**聖求経**」「**希有未曾有法経**」; それぞれ漢訳『**中阿含経**』「**羅摩経**」「**未曾有法経**」と対応。
- リ) 『**ジャータカ**』「**ニダーナ・カタ** (因縁物語)」。
- ヌ) 『**長部**』**經典**「**大般涅槃経** (小乗の涅槃経)」; 漢訳『**長阿含経**』「**遊行経**」と対応。

### III. 単立の仏伝経典 (漢訳)

- ル) 『**修行本起経**」; 197年**竺大力・康孟詳**漢訳。『**中本起経**』と合して一仏伝をなす。
- ヲ) 『**中本起経**」; 207年**曇果・康孟詳**漢訳。『**修行本起経**』と合して一仏伝

をなす。

- ワ) 『太子瑞応本起経』; 223-252/253年支謙漢訳。
- カ) 『異出菩薩本起経』; 280-312年聶道真漢訳。
- ヨ) 『普曜経』; 308年竺法護漢訳。大乘経典。現存サンスクリット文『ラリタ・ヴィスタラ』と対応。
- タ) 『方廣大莊嚴経 (神通遊戯)』; 683年地婆訶羅漢訳。『普曜経』の異訳。大乘経典。
- レ) 『僧伽羅刹所集経』; 384年僧伽跋澄漢訳。撰述署名あり、僧伽羅刹作。
- ソ) 『仏説十二遊経』; 392年伽留陀伽漢訳。
- ツ) 『仏所行讃』; 414-426年曇無讖漢訳。撰述署名あり、馬鳴菩薩作。全文偈誦形式。現存サンスクリット文『ブツダ・チャリタ』と対応。
- ネ) 『仏本行経』; 424-453年釈宝雲漢訳。全文偈誦形式。
- ナ) 『過去現在因果経』; 444-453年求那跋陀羅漢訳。
- ラ) 『仏本行集経』; 587-591/592年闍那崛多漢訳。現存仏伝中最も浩瀚。
- ム) 『衆許摩訶帝経』; 985-994年法賢漢訳。
- ウ) 『大乘の涅槃経』; 481年法顕漢訳『大般泥洹経』、421年曇無讖漢訳『大般涅槃経』(北本・40巻本。のち、法顕漢訳『大般泥洹経』との対校・修治を経て南本・36巻本も成立)等。

#### IV. 中国において撰述された仏伝

- キ) 『釈迦譜』; 502-518年僧祐撰。広本10巻、略本5巻。
- ノ) 『歴代三宝記』; 597年費長房撰。仏伝を含み隋代までの仏教史を記す。
- オ) 『釈迦氏譜』; 665年道宣撰。『釈迦譜』に依り撰した簡略版。

### § 2. 仏伝の内容構成

#### (1) 仏伝の分類

前節において便宜的に I. から IV. の項を立て、27の仏伝テキストを分類した。うち「Ⅲ. 単立の仏伝経典」に列挙したテキストは14あり、「大乘の涅槃経」を最後尾に配したほかはほぼ漢訳年代順に配列した。この14テキストについてどのような細分類が可能かがまず問題となろう。参考として、前節で触れた先学のうち三氏の分類を以下に示す。

◆常盤大定による分類\*9

第一 小乗的

四分律、五分律、有部律、遊行經およびその異訳。

第二 大小未分的

僧伽羅刹所集經、仏所行讚。「後者は本生を交へず、不思議の事蹟を加へず、飽くまで人間仏を描かんとし、前者は本生に重きを置き、相当に発達せる菩薩觀を加ふ。共に、小乗より大乘に移る過渡期のもの」。

第三 大乘的

普曜經、大莊嚴經。

第四 大小調和的

過去現在因果經、仏本行經、修行本起經、中本起經、(太子) 瑞応本起經、異出(菩薩) 本起經、仏本行集經。「前六者は大乘の立脚地に立てるもの、本行集經は小乗仏教を底本として、之に大乘を加味せるもの」。

◆平井宥慶による分類\*10

(草創期以前)

・インド語系資料として、マハーヴァツガ (小品)、ニダーナ=カター (因縁物語)、ブツダ=チャリタ (ブツダ行状記)、マハーヴァストゥ (大事)、ラリタ=ヴィスタラ (遊戯の顛末)。

・仏伝に相当する教説を含む律典として、『五分律』、『四分律』。

I 草創期短編

A1 太子瑞応本起經、A2 異出菩薩本起經 (A1・A2は構成・文言において類似)、B1 修行本起經、B2 中本起經 (B1・B2は合すれば一つの仏伝となる)、C 仏説十二遊經。

II 中期中編

A 過去現在因果經、B1 普曜經、B2 方廣大莊嚴經 (B1・B2は主題の大筋において一致、同本異訳)。

III 総合的長編

A1 仏本行集經、A2 衆許摩訶帝經 (A1・A2は全体構成が同類)。

IV 撰述署名仏伝

A 馬鳴作『仏所行讚』、B 僧伽羅刹所集經。

◆岡野潔の整理に基づく平岡聡による分類\*11

- A 律に留まっている発達仏伝
  - ①Mahāvastu (サンスクリット文)、②Saṅghabhedavastu (サンスクリット文、漢訳＝根本説一切有部毘奈耶破僧事／衆許摩訶帝經)。
- B 律から独立した仏伝經典
  - ①十二遊經、②中本起經、③修行本起經、④異出菩薩本起經、⑤過去現在因果經。
- C 中国で再編纂され成立した仏伝經典
  - ①仏本行集經、②太子瑞応本起經。
- D 註釈として作られた仏伝文献
  - ・Nidhānakathā (パーリ文)。
- E 大乘經典として作られた仏伝經典
  - ・Lalitavistara (サンスクリット文、漢訳＝普曜經、方广大莊嚴經)。
- F 文学として創作された仏伝作品
  - ①Buddhacarita (サンスクリット文、漢訳＝仏所行讚)、②仏本行經、③僧伽羅刹所集經、④Padyacūḍāmaṇi (サンスクリット文)、⑤Jinālamkāra (パーリ文)、⑥Jinacarita (パーリ文)。

内容の別 (大乘的／小乗的)、成立時期・規模の別 (草創期／中期、短編／中編／総合的長編)、テキストのジャンル・形態の別 (註釈／文学、撰述署名の有無)、成立事情 (中国における再編纂) など、分類の観点はさまざまである。ここでは『今昔物語集』との対比のために、次の四テキストに着目する。

- A. 『四分律』\*12；大乘仏教以前のテキスト群の代表として
- B. 『方广大莊嚴經』\*13；大乘仏教におけるテキスト群の代表として
- C. 『仏所行讚』\*14；出生から入滅までの全生涯を網羅するテキストとして
- D. 『過去現在因果經』\*15；日本において最も流布したテキストとして

以上四テキストにおける主な載録挿話を一覧し、『今昔物語集』天竺部\*16における載録の有無をあわせて示すとともに、『今昔物語集』読解の際、検討を要すると思われる挿話・箇所については、各テキストの叙述を抽出・引用する。

## (2) 載録挿話一覧

四つの仏伝テキストおよび『今昔物語集』天竺部について、載録される主な挿話の一覧を以下に記す\*<sup>17</sup>。挿話は01～53の数字を付し、おおよそ時系列に従って縦に配列し、テキストはA.～E.の記号を付して横に配列する。表中の「○」は該当挿話の載録があることを、「－」は載録がないことを示す。また、『今昔物語集』欄の（ローマ数字－算用数字）は、該当挿話が載録される巻および説話番号を示す。なお、表中の「\*」は注を示し、[挿話番号－テキスト記号]を付して表後に記す。

挿話内容		テキスト				
		A.『四分律受戒犍度』	B.『方広大莊嚴經』	C.『仏所行讚』	D.『過去現在因果經』	E.『今昔物語集』天竺部
出生前	01燃灯仏授記（仏統譜）	○*	△*	－	○*	－*
	02過去生の菩薩行	－	○*	－	△*	○*
	03王統譜	○	－	○	○	－
出生	04兜率天から世間を觀察	－	○	－	○*	○(I-1)
	05白象托胎夢	－	○	○	○*	○(I-1)
	06出生	○	○	○	○	○(I-2)
	07即行七歩、出生宣言	△*	○	○	○	○(I-2)
	08生母死歿	－	○	○*	○*	○(I-2)
少年時	09学問・技芸／受業	△*	○	○	○	－*
	10閻浮樹下で禪定	○	○*	○*	○*	○*
	11結婚	－	○*	○	○*	○(I-3)
出家	12四門出遊	△*	○*	○*	○*	○(I-3)*
	13羅睺羅出生	－	－*	○	○*	－
	14出家宣言、出城	○*	○*	○*	○*	○(I-4)*
	15頻婆沙羅王との対面	○	○	○	○	－
	16二仙人との問答	○	○	○	○	○(I-5)
	17苦行とその捨棄	○	○	○	○	○(I-5)
	成道	18降魔	－	○	○	○
19成道		○*	○*	○*	○*	○(I-7)*
20解脱三昧を楽しむ		○*	○	○*	○*	－*
21入滅に誘う魔王を降す		－	○	－	○*	－
22二商人兄弟の供養		○	○	○*	○	－
23燃灯仏授記の想起		○	○*	－	○*	－
説	24梵天勸請	○	○*	○	○*	○(I-7)*
	25初転法輪	○*	○*	○*	○*	○(I-8)*
	26五比丘得果	○	○	○	○	○(I-8)
	27耶舎出家・得果	○	－	○	○	－



法 教 化	28三迦葉帰仏	○	○*	○*	○*	—
	29頻婆娑羅王帰依・得果	○	○*	○	○	—*
	30竹林精舎寄進	○	○	—	○*	—
	31舍利弗帰仏・得果	○*	○	○	○*	○(I-9)*
	32目連帰仏・得果	○*	○	○	○	—
	33大迦葉帰仏	—	—	○	○	—
	34帰郷、父王と再会	—	○	○*	—	—*
	35難陀出家	○*	○	○	—	○(I-18)
	36羅睺羅出家	○*	△*	△*	—	○(I-17)*
	37祇園精舎寄進	—*	—	○	—	○(I-31)
	38波斯匿王帰依	—	—	○*	—	—
39切利天で生母への説法	—	—	○*	—	○(II-2)*	
40憍曇弥出家	—*	—	—	—	○(I-19)	
41鴛掘摩羅教化	—	—	○*	—	○(I-16)	
提婆達多破僧	42雁の一件での遺恨	—	—	—	—	○(I-10)
	43破僧・悪行	—*	—	○*	—	○(I-10,III-27)*
	44阿闍世の仏への帰依	—	—	○*	—	○(I-10,III-27)*
	45墮地獄	—	—	○	—	○(I-10)
減一亡族	46釈迦族滅亡	—	—	—	—	○(II-28)
入 滅	47入滅予告	—	—	○	—	○(III-28)
	48純陀の供養	—	—	○	—	○(III-29)
	49遺誡	—	—	○*	—	○(III-30)*
	50入滅	—	—	○*	—	○(III-31)*
	51荼毘、舍利八分、造塔	—	—	○*	—	○(III-34,35)*
入滅後	52第一次結集	—	—	○	—	○(IV-1)
	53阿育王による造塔	—	—	○	—	○(IV-3)

## 【注】

[01-A] 菩薩の名は<sup>みきやくまのう</sup>弥却摩納。成道後の仏が二商人兄弟に髪・爪を与え、供養の功德を説く際、自らの過去生、弥却摩納が定光仏のために髪を地に布き供養した話を物語る。

[01-B] 挿話としては語られないが、兜率天において諸天の奏でる伎楽の音声として次のようにある。「[尊、憶ふに<sup>おんとう</sup>然灯に記せられたまひてより、無辺の福を<sup>しゃくじふ</sup>積習し、生死を超越して、智慧より光明を発す。(後略)」（兜率天宮品第二）。また、成道後の仏が、解脱三昧を樂しみつつ説いた偈にも次のようにある。「[（前略）然灯如来、我に記を授けたまひき。汝、来世に於て、正覚を成じ、仏と作つて、名を<sup>しゃかもん</sup>釈迦文と号せんと。(後略)」（大梵天王勸請

品第二十五)。

なお、巻第一序品第一には、かつて『方广大莊嚴經』を説いた釈迦仏以前の仏として、波頭摩勝仏から迦葉仏に至る過去五十六仏の名が列挙されている。

[01-D] 菩薩の名は善慧。仏の名は普光。なお、普光仏入滅後、善慧は正法を護持し、人界や転生後の天界で三乗の法を説き、衆生を教化したことが叙述される。

[01-E] 授記は叙述されないが、仏が過去生における耶輸陀羅との因縁を語る際、燃灯仏供養に言及している (I-17)。「我れ昔燃灯仏の世に菩薩の道を行ぜし時、五百の金の錢を以て五茎の蓮花を買て仏に奉りき。汝又二茎の花を以て副て奉れり」。

[02-B] 過去生の菩薩行は、例えば「布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、方便善巧の勝波羅蜜、大慈・大悲・大喜・大捨を熾然に修行す」(兜率天宮品第二)「昔已に無量億の慈悲喜捨諸の勝行を行じたまひ、此の一切の諸の勝行を以て、世間の諸の衆生に分布したまへり」(音楽発語品第十三)のように総括される。六波羅蜜・四無量心等の修行、過去諸仏への供養の具体相は、十方諸仏の説く頌に縷縷列挙される (音楽発語品第十三)。

[02-D] 具体的挿話は叙述されないが、普光仏に供養する花を得るべく「青衣」(大家に奉仕する女子)と交わした問答中に、菩薩行の決意が表明される。「(青衣)「我、今、この花を以て相與ふべし。願はくは、我、生、生、常に君が妻たらん。」善慧答へて言ふ、「我、梵行を修し、無為の道を求む。生死の縁を相許すを得ず。」青衣即ち言ふ、「もし、我がこの願に従はずんば、花は得べからず。」善慧また曰く、「汝、もし、決定して、我に花を與へずんば、当に汝が願に従ふべし。我は布施を好みて、人意に逆はず。もし、来りて、我より、頭・目・髓腦と、及び妻子とを乞ひ求むるあらしむるも、汝、鬪を生じて、吾が施心を壊る莫れ。』」

また、成道前、太子が魔王と戦う際、地神が現れ太子過去生の菩薩行を証言する。「菩薩、昔、頭目髓腦を以て人に施し、出せる血、大地に浸潤し、国城・妻子・象馬・珍宝、用て布施せること、秤計すべからず。無上正真の道を求めんが為なり。(後略)』」。

梵天勸請の際の梵天も仏の過去生の菩薩行に言及する。[24-D] 参照。

[02-E] 過去生における菩薩行を具体的に語る挿話は、天竺部の最終、巻第五に載録される (V-7, 8, 9, 10, 11, 12, (13), 14, 18, 26, 29。13は月の兔由来譚で

あり、本生譚として名高いが、本文中ではその旨明示されない)。仏伝の起点、巻第一第一話は降兜率・託胎を語る。

なお、I-6, 17, II-3, 4, 5, 28, III-13, 19, 28, IV-17でも仏の過去生に対する言及があり、うち二箇所では菩薩行が総括的に叙述される。「〔菩薩、昔し頭目・髓腦・国城・妻子等を諸の人に与へて、無上菩提を求給ひき。(後略)〕」(I-6)。「〔仏の世に出て菩薩の道を行給ひし事は、我等衆生を利益拔済し給はむが為也。伝へ聞けば、人を済ひ給ふ道には身をもみをも不貪ず、命をも捨給ふ。所謂一の羽の鶴に身を捨て、七つの虎に命を亡ぼし、眼を扶て婆羅門に施し、血を出して婆羅門に飲しめ、如此くの有難き事をそら施し給ふ。(後略)〕」(IV-17)。

[04-D] 父母とすべき夫婦の因縁を観察した菩薩が、母の死歿時期を予見したことが叙述される。「(前略)白浄王の過去の因縁を観ずるに、夫妻真正にして、父母と為すに堪へ、又、摩耶夫人の、寿命の修短を観ずるに、太子を懐抱して十月を満足して、太子便ち生れ、生れて七日にして、その母命終す。既にこの観を作して(後略)」。[08-D] 参照。

[05-D] 懐胎中、すでに菩薩が衆生に対し説法したことが叙述される。「菩薩、晨朝に、母胎中に於て、色界諸天の為に、種々の法を説き、日中時に至りて、欲界諸天の為に、また、諸法を説き、日晡時に於て、またまた、諸鬼神の為に法を説き、夜に於て、三時、またまた、是の如く無量の衆生を成熟し利益す」。

[07-A] 釈迦に関する叙述はないが、定光菩薩には次のような出生宣言がある。「〔我れ天上世間に於て最上最尊なり、我れ当さに一切衆生の生・老・病・死・苦を度すべし〕」。

[08-C] 後年太子が出家した時、帰城を促し苦諫する御者車匿に太子は次のように述べる。「〔(前略)衆生は各おの趣きを異にし、乖き離るるの理は自ら常なり。縦令、我れ、今日諸親族を捨てざるとも、死至れば形神乖き、当に復た云何にして留まるべきや。／慈母、我れを懐妊して、深く愛して常に苦を抱くも、生已り、即ち命終れば、竟に子の養を蒙らず。存亡各おの路を異にし、今何処に求むるを為さん。(後略)〕」。

[08-D] 生母死歿は次のように叙述される。「太子既に生れ、始めて満七日にして、その母命終す。太子を懐ける功德の大なるを以ての故に、忉利に上生して、封受四禪なり、太子、福德威重にして、女人の礼を受くるに堪ふるものなきを自ら知る。故に将に終らんとするに因りて、これに託して生れたるな

り」。[04-D] 参照。

[09-A] 釈迦に関する叙述はないが、定光菩薩に関する叙述がある。

[09-E] 学問・技芸に関する具体的叙述はないが、成道後の仏が子羅睺羅を出家させようとした時、これに抵抗する耶輸陀羅の発言に次のようである。「[我れ家に在し時、八国の諸の王競ひ来て父母に我れを乞ひき。父母不許して、太子を聳として会する事畢にき。太子、才芸人に勝れ給へる故也。(後略)]」。

[10-B] 禅定の契機は農夫の労苦を見たことである。「諸の農夫の、勤勞して役を執るを見る。菩薩見已つて、慈悲の心を起し、世間に斯の如き苦有ることを哀れみ嗟きて、即ち是の念を作さく「何の処か空閑なる。我当に彼に於て離苦を思惟すべし」と」。

[10-C] 禅定は四度目の出遊時、比丘に出会う前のこととして叙述される。「路傍に耕人の、壤を墾し、諸虫を殺すを見て、其の心に悲惻生じ、痛は心を刺貫するに踰えたり。／又た彼の農夫の、勤苦して形、枯悴し、蓬髪にして流汗し、塵土の其の身を空すを見る。／耕牛も亦た疲困し、舌を吐いて而も急喘せり。太子は性慈悲にして、極めて憐愍心を生ぜり。／慨然として長歎を興こし、身を降して地に委ねて坐し、此の衆苦を觀察し、生滅の法を思惟せり。／『嗚呼、諸世間は、愚癡にして能く覺る莫し』と。諸人衆を安慰して、各おの処に随つて坐せしむ。／自らは閻浮樹に陰れ、端坐して正思惟し、諸もろの生死・起滅、無常變を觀察せり。(後略)」。

[10-D] 禅定の契機は鳥が虫を食うさまを見たことである。「(前略) 淨居天、化して壤虫と作り、鳥随つてこれを啄む。太子、見已りて、慈悲心を起し、「衆生や愍むべし。互に相呑食す」とて、即便ち思惟す、「欲界の愛を離れて、是の如く、乃至、四禅地を得ん。』」。

[10-E] 契機は示されず、樹木の種類も特定されないが、四度目の出遊時、比丘に出会う以前に禅定の叙述がある。「城の北門を出て園に至給て、馬より下て樹の本に端しく居給て、御共の若干の人を去けて心を一にして世間の老・病・死の苦を思惟し給ふ」。

[11-B] 菩薩は独り山林で禅定に入ることを望みとしながらも、「大悲心を起し、思惟方便して衆生を度せんと欲し」、また「(前略)「妻子等有るも、五欲の染する所と為るに非ざることを示さん。我今過去仏に随順して、諸の禅定を退失せざらん。(後略)]」と決意して結婚を受け入れる。耶輸陀羅妃の選出過程、及び耶輸陀羅の父執杖大臣が菩薩を娘の夫と認める過程が詳密に語られる。

[11-D] 結婚した太子のありようは次のように叙述される。「爾の時、太子、恒にその妃と、行住坐臥、未だ曾て俱にせずんばあらざるも、初より世俗の意あるなく、静夜中に於て、ただ禅観を修するのみ」。

[12-A] 釈迦に関する挿話はないが、世苦の観察は次のように叙述される。「今此の世間を観ずるに甚だ苦悩と為す。生あり、老あり、病あり、死あり、此に死して彼に生れ、此の身を以ての故に、苦際を尽さず、是の如きの苦身何んが尽すことを得べけん」。一方、定光菩薩に関しては簡略ながら挿話がある。即ち、首陀会天が老・病・死・沙門として化現し、これを見た菩薩が世苦を厭うに至ったことが叙述される。

[12-B] 老人等を見た菩薩は、老い等が「一切世間」の苦、したがって「我が此の身」の苦であることを知り、免れたいと願う。例えば、老の何たるかを知った後の馭者との問答は次の通りである。「此の人独り爾るや、一切皆然るや。」馭者答へて言はく、「一切世間皆悉く是の如し。」菩薩又問ふ、「我が此の身の如きも、亦当に爾るべきや。」馭者答へて言はく、「凡そ是れ生有るものは、若は貴も、若は賤も、皆此の苦有り」と。爾の時菩薩、愁憂して樂しまず、馭者に語つて曰く、「我れ今何の暇あつてか、園林に詣つて縦逸に遊戯せんや。当に方便して斯の苦を免離せんことを思ふべし」と。

[12-C] 四門出遊は羅睺羅出生の後に叙述される。また、三度目の出遊で死人を見た後、御者は王勅をおそれ、帰還を命ずる太子に背き車を園林に向かわせたが、太子は姦女たちの誘惑に心動かされず、老病死の苦を思い続けたと叙述される。

[12-D] 老人等を見た菩薩は、老い等が「一切」の苦、したがって「我」の苦であることを知り、免れたいと願う。例えば、老いの何たるかを知った後の従者との問答は次の通りである。「太子、また問ふ、唯、この人のみ老なりや、一切皆然りや。」従者答へて言く、「一切皆悉く、此の如くなるべし。」爾の時、太子、この語を聞き已りて、大苦悩を生じて、自ら念言す、「日月流れ邁き、時変り歳移り、老の至る電の如し。身安んぞ恃むに足らん。我、富貴と雖も、豈独免れんや。云何ぞ、世人、怖畏せざる。』」。

[12-E] 老人等を見た太子は、老い等が「万の人」「余の人」の苦でもあると知り、「憂の心」を懐く。その際、必ずしも自身の境涯のこととしておそれる様子は叙述されない。例えば、老いの何たるかを知った後の従者との問答は次の通りである。「太子又問給はく、「只此の人のみ老たるか、万の人皆此く有る事か」と。「万の人皆此く有る也」と。太子車を廻して宮に返給ぬ」。また、

病について知った時の反応を次のように叙述する。「太子、慈悲の心を以て彼病人の為に自ら悲を成して（後略）」。

[13-B] 羅睺羅に関する叙述は成道後の帰郷時にある。耶輸陀羅の語りから、羅睺羅は懐妊後五年ほどして生まれたことが知れる。[36-B] 参照。

[13-D] 出家の志を述べた太子を父王が制止した時、太子が神秘的な仕方<sup>こくし</sup>で耶輸陀羅妃を懐妊させたことが叙述される。「王、太子に語る、「(前略) 国嗣既に重し<sup>どくまさ</sup>に相継ぐべし。唯、願はくは、我が為に、汝が一子を生みて、然る後に俗を絶てよ。また相違<sup>あひみ</sup>せじ。」爾の時、太子、父王の言を聞きて、心に自ら思惟<sup>しゆみ</sup>す、「大王の苦<sup>ねんごう</sup>に我を留むる所以のものは、正に自ら国に紹嗣<sup>せうし</sup>なきが為のみ。」この念<sup>ねん</sup>を作し已りて、王に答へて言く、「善い哉、勅の如くせん」とて、即ち左手を以て、その妃の腹<sup>ゆびき</sup>を指す。時に耶輸陀羅、便ち体の異なるを覚え、自ら娠<sup>はら</sup>めるあるを知る」。

[14-A] 出家に対する父母の悲歎が叙述される。「父母愁憂<sup>すなは</sup>涕泣して、出家学道せしむることを欲せず。時に菩薩強えて父母に違ひ、輒<sup>しゆほつ</sup>ち自ら鬚髮を剃り、袈裟を著け、家を捨て、非家に入る」。

[14-B] 出家の志を父王に告げた意図は次のように叙述される。「我若し父王に啓<sup>まう</sup>さずして、私に自ら出家せば、二種の過<sup>くわ</sup>有らん。一には法教に違ひ、二には俗理に順ぜず」。

出家の志を聞いた父大王が涕泣し、王位・国財<sup>ひそか</sup>の譲渡を申し出て制止すると、菩薩は次のように述べて説得する。「窃に四種の願有り、未だ本心に称はず。大王若し賜はらば、当<sup>まさ</sup>に出家の望を断つべし。一には衰老せざらんことを願ふ。二には恒に少壮ならんことを願ふ。三には当に病無からんことを願ふ。四には恒に死せざらんことを願ふ」（中略）「四願若し得難くんば、今は但一願を求めん。更に後身<sup>ごしん</sup>を受けざらん」。これにより王は「愛心稍々微薄」となり、「心には猶ほ熱悩を懐けり」としながらも「我も今亦随喜す」と言い、菩薩は歡喜して去る。一方、出城後、馭者車匿に託し父王に伝えた言葉には、ひとえに利他の志が述べられる。「(前略) 但、一切衆生の正路<sup>しやうろ</sup>に迷ひ、生死に没在するを見て、拔濟せんと欲するが為の故に出家するのみ。(後略)」。

[14-C] 父王への暇乞いの言葉は次の通りである。「一切の諸世間は、合会<sup>かなら</sup>するも要<sup>かなら</sup>ず別離す。是の故に願わくは出家し、真解脱を求めんと欲す」。父王の悲歎は深く、「心即ち大いに戦き懼ること、猶お大狂象の、小樹枝を動揺するが如し」と叙述される。太子の手を執り涙を流して制止すると、大

子は四つの絶対的願望を告げる。「『惟だ四事を保するを為せば、当に出家心を息むべし。／子の命を保ちて常に存し、無病にて衰老せず、衆具損滅せざれば、命を奉じて出家を停めん』」。

出城後、御者車匿に託した父王への伝言では次のように言う。「『願わくは愛恋の情を捨てられよ。／生・老・死を脱する為めの故に、苦行林に入れり。亦た生天を求めず、仰恋の心無きに非ず、亦た結恨を懐かず、唯だ憂悲を捨てんと欲するのみ。／長夜に恩愛を集むるも、要らず当に別離有るべし。常に離有るを以ての故に、故に解脱の因を求む。若し解脱を得し者は、永く親と離るるの期無し。／憂を断つ為めに出家せり。子の為めに憂を生ずる勿かれ。(後略)』」。

ともに帰城するよう苦諫を行った御者車匿に対する応答については、[08-C] 参照。

[14-D] 父王に対し出家の志を告げる際、次のように言う。「『恩愛の集會には、必ず別離あり。唯、願はくは、我が出家学道を聴したまへ。一切衆生の愛別離苦を、皆解脱せしめんを、願はくは、必らず、許を垂れて、留難せられざれ。』」。父の悲歎は深く、「(前略) 心大に苦痛すること、猶、金剛の、山を摧破するが如く、拳身戦き掉ひ、本座に安んぜず、太子の手を執りて、また言ふ能はず、啼泣流涙し、嘘啼哽咽す」と叙述され、太子はこの時は実行に至らず、出家を思い憂う。

御者車匿に出城を命ずる際、次のように言う。「『我、今、一切衆生の為に、煩惱結使の賊を降伏せんと欲するが故に、汝、今、我がこの意に違ふべからず。』」。

城門を出た瞬間、次のように誓う。「『我、もし、生老病死憂悲苦恼を断ぜずんば、終に宮に還らじ。我、もし、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、またまた、法輪を転ずる能はずんば、要らず、還、父王と相見じ。もし、恩愛の情を尽さざるべくば、終に、還、摩訶波闍波提、及び耶輪陀羅を見じ。』」。

苦行林に至り、自らを残し帰城するよう車匿に命ずる時、歎く車匿に次のように言う。「『世間の法、独り生れて独り死す。豈、また、伴あらん。また、生老病死の諸苦あり。我、云何ぞこれと伴侶たるべき。吾、今、諸苦を断ぜん」と欲するが為の故に、ここに來至す。苦、もし、断ずる時、然る後に、一切衆生と、伴侶たるべし。我、即時に於て、諸苦未だ離れず。云何ぞ、汝と伴侶たるを得ん。』」。

父王・摩訶波闍波提・耶輪陀羅への形見・伝言を託す時、親族の歎きをお

それる車匿に次のように言う。「〔(前略)世は皆離別あり、豈常に集聚せん。我、生れて七日にして、母、命終したまへり。母子ども、尚、死生の別あるを、況んや余人をや。(後略)〕」。

自ら鬚髪を剃った時、発願して「今、鬚髪を落しぬ。願はくは、一切の興に、煩惱、及び習障を断除せん。」、袈裟を着した時、発願して「〔(前略) 吾がこの衣を服するは、一切衆生を撰救して、その煩惱を断ぜんと欲するが為なり。〕』と云う。

さらに、父王から遣わされた王師・大臣が帰城を乞うた時、次のように言う。「〔我、豈、父王が、我に於て、恩情の深さを知らざらんや。ただ、生老病死の苦を畏る。是を以て、ここに来れるは、断除の為の故なり。もし、恩愛をして、終日、合会し、また生老病死の苦なからしめば、我また何すれぞ来りて此に至らん。我、今、父王に遠違する所以は、将来の和合を為さんと欲するが故のみ。父王の憂愁の大火、今、熾然すと雖も、我と父王と、ただ、今生に、この一苦あるを余すのみ。将来は、自ら当に、永く、この患を絶つべし。(後略)〕」。

[14-E] 父王に対し出家の志を告げる際、次のように言う。「〔恩愛は必ず別離有り。唯し願は、我が出家・学道を聴し給へ。一切衆生の愛別離苦を皆解脱せしめむや〕」。

御者車匿に出城を命ずる際、次のように言う。「〔我今、一切衆生の為に煩惱・結使の賊を降伏せむと思ふ。(後略)〕」。父の悲歎は深く、「〔(前略) 心大に苦し痛み給事、尚し金剛の山を摧破するが如し。身拳て居給へる座不安ず。太子の手を取て、物宣ふ事無しと哭給ふ事無限し〕』と叙述され、太子はこの時は実行に至らず、出家を思い憂う。

城門を出た瞬間、次のように誓う。「我れ若し生老病死・憂悲苦悩を不断ずは、終に宮に不返じ。我れ菩提を得、又法輪を不転ずは、返て父の王と不相見じ。我れ若し恩愛の心を不尽ずは、返て摩訶波闍及び耶輪陀羅を不見じ〕」。

苦行林に至り、自らを残し帰城するよう車匿に命ずる時、悲歎し命に従おうとしない車匿に次のように言う。「〔世間の法は、一人死す、一人生れぬ。永く副ふ事有らむや〕」。

[19-A] 初禪→二禪→三禪→四禪→初明(宿命智)→第二明(見衆生天眼智)→第三明(漏尽智)。

[19-B] 初禪→二禪→三禪→四禪→天眼通(天眼明)→宿命智(宿命明)→十二



因縁の順観・逆観→四諦→漏尽明、三明具足。

[19-C]過去の無数の生を想起→天眼通獲得、五道（地獄・畜生・餓鬼・人・天）を觀察して輪廻の苦を知る→十支縁起の順観・逆観。

[19-D]「一切衆生、救済者なく、五道に輪廻して、津を出るを知らず、皆悉く虚偽にして、真実あるなし。而してその中に於て、横に苦樂を生ず。」と思惟→天眼獲得、五道（地獄・畜生・餓鬼・人・天）を見、「三界の中、一の樂あるなし」と思惟→十二因縁の逆観・順観→一切種智を成ず。

なお、三迦葉の第一、優樓頻螺迦葉は一切種智の成就を仏の奇特の第二に挙げている。「我、世尊を見るに、大慈大悲を成就して、三事の奇特あり。一には、神通變化。二には慧心清徹、決定して一切種智を成ず。三には、善く人根を知り、随順摂取す。（後略）」。

[19-E]入定、真諦を思惟→天眼獲得→一切種智を成ず。

[20-A]菩提樹下で七日娛樂→二商人兄弟の供養・帰依後、さらに七日娛樂→呵梨勒樹神の供養・帰依後、樹下で七日娛樂→鬱鞞羅婆羅門の供養・帰依後、離婆那樹下で七日娛樂→鬱鞞羅婆羅門の妻の供養・帰依後、さらに七日娛樂→鬱鞞羅婆羅門の男女の供養・帰依後、文驪竜王宮で七日娛樂→文驪竜王の帰依後、阿踰波羅尼拘律樹下で法を説くまいと決める。「我れ今已に此の法を獲たり、甚深にして解し難く知り難し。永寂休息微妙最上なり。智者のみよく知る、愚者の習ふ所に非ず。衆生は異見・異忍・異欲・異命なり。異見に於て櫛窟を樂む、衆生是れ櫛窟を樂むを以ての故に、縁起法に於て甚深にして解し難し。復甚深難処あり、諸欲を滅すれば、愛尽涅槃なり、是の処亦見難し。故に我れ今法を説かんと欲するも、余人知らざれば、則ち我れに於て唐勞疲苦するのみ」。

[20-C]解脱三昧の楽しみと説法心との間の揺れが叙述される。「仏は彼の七日に於いて、禪思して心清浄に、菩提樹にて觀察し、瞻視して目瞬かず。「我れは此処に依り、宿心の願を遂ぐるを得、無我の法に安住せり」と。仏眼にて衆生を觀て、哀愍の心を發上し、清浄を得しめんと欲す。／「貪・患・癡の邪見にして、飄流して其の心を没す。解脱は甚だ深妙にして、何に由りてか能く宣ぶるを得ん」と。勤方便を捨離し、默然に安住せんとす。／顧みて本誓願を惟い、復た説法心を生ぜり」。

[20-D]法を説くまいという仏の決意は、衆生の罪を抑止するためと叙述される。「(前略)わが所得の法や、甚深にして解し難く、唯、仏と仏と、乃ち能くこれを知るのみ。一切衆生、五濁の世に於て、貪欲・瞋恚・愚癡・邪見・

憍慢・諂曲の覆障する所と為り、薄福鈍根にして、智慧あるなし。云何ぞ能く我が所得の法を解せん。今、我、もし、転法輪を為さば、かれ、必、迷惑して、信受する能はず、誹謗を生じて、当に悪道に墮し、諸の苦痛を受くべし。我、寧、黙然として般涅槃に入らん。』。

[20-E]成道と梵天勸請が連続的に叙述される。「(前略)無明を破し智慧の光を得給て、永く煩惱を断じて一切種智を成じ給ふ。此より釈迦と称し奉る。／釈迦牟尼如来、黙然として座し給へり。其の時に大梵天王来て、「一切衆生の為に法を説給へ」と申し給ふ」。

[21-D]魔王による般涅槃への誘惑は、初転法輪後、三迦葉の第一、優楼頻螺迦葉への教化途中に叙述される。魔王に対する仏の応答は次の通りである。「我、今、未だこれ般涅槃の時ならず。所以は何。わが四部衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、未だ具足せざるが故に。度すべき所のもの、皆未だ究竟せず。諸外道衆、悉く未だ降伏せず」。

[22-C]二商人兄弟の供養は梵天勸請の後に叙述される。

[23-B]梵天勸請の直前に仏が説いた偈の中で燃灯仏授記が想起される。「然灯如来、我に記を授けたまひき。「汝、来世に於て、正覚を成じ、仏と作つて、名を釈迦文と号せん」と。彼の時に於て、已に法を証すと雖も、今、我が得る所、方に究竟せり」。

[23-D]燃灯仏授記に関しては、大迦葉帰仏ののち、諸比丘に対する仏の所説として叙述される。この時あわせて三迦葉・舍利弗・目連をはじめ、諸々の弟子・信徒の過去生の因縁についても説かれ、テキスト全体の結びとなる。「普光如来の、世に出興したまへる時の、善慧仙人は、豈異人ならんや。即ち我が身、これなり。縁路に遇へる五百の外道の、共に論議し、及び随喜せる所のものは、今、この会中の優楼頻螺迦葉兄弟、及びその眷属の千比丘、これなり。時に花を売れる女は、今の耶輸陀羅、これなり。善慧仙人の髪、地に布ける時、傍に二人ありて、仏前の地を払ひ、及び二百人の随喜して助けたるは、今、この会中の舍利弗・大目犍羅夜那、并に二百の天は、我初めて得道して、鹿野苑中に、始めて法輪を転ずる(時の)八万の天子、及び頻毘娑羅王の將るたる眷属、八万那由他の人、及び九十六万那由他の天これなり。／汝等当に知るべし。過去の種因は、無量劫を経るも、終に磨滅せざるを。我、往昔に於て、一切の善業を精勤に修習し、及び大願心を発して、退転せざりしが故に、今に於て一切種智を成就するを得たり。汝等、宜しく応に道行を勤修して、懈怠を得るなかるべし。」／時に、諸の比丘、仏の所

説を聞き、歡喜頂戴し、禮を作して退きぬ」。

[24-B]法の説き難さ、解し難さは、例えば次のように表現される。「此の法、言説を遠離して、猶、虚空の如く、染する所無し。思惟心意、皆行はれず。若し人能く知らんこと、甚だ希有なりとす。此の法性は、文字を離る。孰か能く其の義理に悟入せんや。多劫中に於て、仏を供養して、方に能く聞いて信解を生ずること得ん。有と説き非有と説く可からず。有に非ず無に非ざることも復然り」。

説法の決断を下したのは、衆生の能力に邪定聚・正定聚・不定聚(下根・上根・中根)の三段階を観察したことによる。「如来、爾の時、是の思惟を作さく、「我れ若しは法を説き、若しは法を説かざるも、邪聚の衆生は畢竟知らざらん」と。復、更に思惟すらく、「我れ若しは法を説き、若しは法を説かざるも、正聚の衆生は皆能く了知せん」と。復、更に思惟すらく、「我れ若し法を説かば、不定の衆生も亦能く了知せん。我れ法を説かずんば、即ち了知せざらん」と。諸の比丘よ。如来、爾の時、不定聚の衆生を觀じて、大悲心を起し、是の如きの言を作さく、「我れ本より此等の衆生の為に、法輪を転ぜんと欲する故に、世に出でたり」と」。

[24-D]仏に説法を乞う梵天は、仏自身のかつての志と衆生の素質を説く。「世尊、往昔、衆生の為の故に、久しく生死に住し、身の頭目を捨てて、以て布施し、備に諸苦を受け、広く徳本を修し、今、始めて無上道を成じつつ、云何ぞ黙然として説法したまはざる。衆生、長夜、生死に没溺し、無明の暗に墮し、出期甚だ難し。然るに、過去世の時、善友に親近し、諸の徳本を植ゑ、法を聞きて、聖道を受くるに堪任ふる衆生あり。唯願はくは、世尊、これ等を以ての故に、大悲力を以て、妙法輪を転じたまへ」。

[24-E]梵天の言葉は次の一言のみである。「一切衆生の為に法を説給へ」。

[25-A]中道・八正道の説法→四聖諦三転十二行相の説法→一人目 憍陣如の得預流果・具足戒受戒→布施・持戒・生天の法の説法→他の四人の得預流果・具足戒受戒→色・受・想・行・識の無我・無常・苦(変易の法)の説法→五人の比丘の得阿羅漢果。

[25-B]中道・八法(八聖道)の説法→四聖諦三転十二行相の説法→五根・五蘊の無常・苦・空・無我の説法。

初転法輪時、釈迦仏の声はあまねく十方仏土に至り、十方の諸仏も黙してこれを聴聞した、また、弥勒菩薩の要請により仏は「法輪の性」(一切諸法の空寂靜、無自性、平等)を説き、あわせて仏の諸功德を示した、と叙述さ

れる。

[25-C] 中道の説法→八正道（正見・平等覺觀・正語・正業・正命・方便・正念・正定）の説法→四真諦の説法。

[25-D] 中道・八正道の説法→四諦三転十二行相の説法→五蘊無常・苦・空・無我の説法。

[25-E] 中道・四諦の説法。「〔前略〕苦行を修すれば心悩乱す。楽を受けば心に榮着す。此の故に、我れ苦・楽の二道を離れて中道の行に随て、今菩提を成ずる事を得たり」と説給て、如来、五人の為に苦・集・滅・道の四諦を説給ふ。

[28-B] 三迦葉の第一、優楼頻螺迦葉への教化に際しては、毒龍征伏等、諸々の神通力行使を見せた。三迦葉とその弟子をあわせ、千人の弟子とともに赴いた波羅奈国における教化は、次のように叙述される。「諸の弟子の為に、或時は変現し、或時は法を説き、或は復戒を説く。仏の威神を觀て、欣喜せざるは莫く、尽く羅漢と成れり」。

[28-C] 三迦葉の第一、鬱毘羅迦葉への教化に際しては、悪龍征伏等、まず神通力行使を見せたことが叙述される。「仏は以て時宜に随い、種々の神変を現わし、其の心の所念を察し、変化して之れに応ず。彼の心を柔軟にして、正法の器と為すに堪え、自ら其の道の浅く、世尊に及ばざるを知らしむ。謙下の心を決定し、随順して正法を受けたり」。

[28-D] 三迦葉の第一、優楼頻螺迦葉への教化は、まずその我慢を碎くに十分な神通力行使を見せたのちに行われた。「〔前略〕優楼頻螺迦葉兄弟三人あり。摩竭提国に在りて、仙道を学び、国王臣民、皆悉く帰信す。また、それ、聰明利根にして、悟り易し。然れども、その我慢も、また摧伏し難し。（後略）」「優楼頻螺迦葉、根縁漸く熟す。今は正にこれ調伏その時なり。」

[29-B] 五蘊の無常・苦・空・無我の説法→善因樂果（天人の中、十方諸仏の前への転生）・悪因苦果（三悪道への転生）の説法→十二因縁の順観・逆観の説法。

[29-E] 頻婆沙羅王帰依の挿話はないが、現在生の見仏・聞法・得果の善因として過去生の塔修治を示す叙述がある（Ⅱ-17）。

[30-D] 精舎の寄進を受けた仏は、呪願の偈に次のように説く。「もし人能く布施すれば、慳貪を断除す。もし人能く忍辱なれば、永く瞋恚を離る。もし人能く善を造せば、則ち愚癡に遠かる。能くこの三行を具すれば、速に般涅槃に至る。もし貧窮の人あり、財の布施すべきなくば、他の施を修する

- を見ん時、隨喜の心を生ぜよ。隨喜の福報は、施と等しくして異なるなし。』。
- [31-A] 優波提舍（舍利弗）が阿濕卑（五比丘の一人、馬勝）を通じて知った法は次のように叙述される。「〔(前略) 如来は因縁生の法を説く、亦因縁滅の法を説く、若し法の因つて生ずる所は、如来是れ因と説く、若し法の因つて滅する所は、大沙門亦此の義を説く。此れは是れ我が師の説なり〕」。
- [31-D] 舍利弗が阿捨婆耆（馬勝）を通じて知った法は次のように叙述される。「〔一切諸法の本は、因縁より生じて主なし。／もし能くこれを解せば、則ち眞実の道を得ん。〕」。
- [31-E] 舍利弗の仏法との出会いは次のように叙述される。「其の時に、仏の御弟子馬勝比丘の四諦の法を説を聞て、始て外道の門徒を背て、釈迦の御弟子と成て初果を得たり」。
- [32-A] 拘律陀（目連）が目連から伝えられた法については、[31-A] 参照。
- [34-C] 父王との再会に先立ち、仏が父王の心から子にかかわる煩惱を除いたことが叙述される。「仏は父王の心に、猶お子の想いを存するを知る。其の心を開かんが為めの故に、並びに一切衆を哀れんで、神足もて虚空に昇り、両手にて日月を捧ぜり。／空中を遊行し、種種の異変を作す。或いは分身すること無量なるも、還りて復た合して一と為す。／或いは水を履むこと地の如く、或いは地に入ること水の如し。石壁も身を礙げず、左右より水火を出せり。／父王は大いに歡喜し、父子の情悉く除けり」「先に妙神通を現わして、王の心を歡喜せしめ、信を楽しむの情已に深く、正法の器為るに堪ゆ」。
- [34-E] 帰郷時の挿話はないが、父王臨終に病苦を除き、説法して得果に至らせたこと、「末世の衆生の父母の養育の恩を不報ざらむ事を誠しめ給はむが為めに、父の御棺を荷はむと為」たことが叙述される（II-1）。
- また、過去生にも父子として出会い、自らの菩薩行によって歎きを与えた父を思い、過去生の父が過去生の自らのために建てた卒堵婆に礼拝する挿話がある（II-4）。
- [35-A] 難陀出家については、羅睺羅出家後、父王が仏を訪ねて泣く泣く懇請した言葉の中に見える。「爾の時輸頭檀那王（父王）、仏の羅睺羅を度して出家せしむると聞き、悲泣して僧伽藍の中に来りて世尊の所に至り、到り已りて頭面礼足して一面に在りて坐す。（中略）「世尊出家したまふも、我れに少望心ありき、而も「難陀童子当さに家業を為すべし」と。而も世尊復度して出家せしむ。難陀既に出家し已りて、我れに復少望心ありき、「羅睺羅当さ

に家業を為すべし、紹嗣絶えず」と。而も今世尊復度して出家せしめたまふ。父母は子に於て饒益する所多し。乳養瞻視して其の成長に逮ぶは、世人の観る所なり。而も諸の比丘、父母聴さゞるに輒く便ち之を度す。唯願はくは世尊、自今已去、諸の比丘に勅したまへ、父母聴さゞれば、度して出家せしむることを得ず」と。爾の時、世尊黙然として王の語を受けたまふ。

[36-A] 羅睺羅出家は、仏が迦維羅衛城（迦毘羅衛城）内での乞食を終え、城を出ようとする時のこととして叙述される。「時に於て羅睺羅の母、羅睺羅と高閣上に在りて、仏の来りたまふを見、羅睺羅に語りて言はく、「彼の来る者は、是れ汝の父なり」と。爾の時羅睺羅疾々に楼を下りて如来の所に至り、頭面礼足して一面に在りて立つ。時に世尊手を以て羅睺羅の頭を摩でたまふ。羅睺羅自ら念ずらく、「生れてより已來、未だ曾て是くの如きの細滑柔軟の樂を得ず」と。仏問うて言はく、「汝能く出家学道するや不や」と。答へて言はく、「我れ能く出家す」と。爾の時、仏一指を舒べして羅睺羅に與へ、捉いて將さに僧伽藍の中に至らんとす。（後略）。

[36-B] 羅睺羅出家の挿話はないが、その父を怪しむ者があるという耶輸陀羅の訴えを受け、仏が実子の証明をなす挿話がある。「耶輸陀羅、羅睺羅を携ふ。年已に七歳なり。仏所に來至し、仏の足を稽首して、瞻對問訊し、仏に白して言さく、「久しく侍奉に違して、供養を曠廢しぬ。諸の眷属、皆疑心有り。太子、国を去りたまひて十有二載。何に従つてか懷孕して、羅睺羅を生めるかと。」仏、父王及び諸の群臣に告ぐらく、「耶輸陀羅、節を守る貞白にして、瑕疵無きなり。若し信ぜずんば、今、当に証を取るべし」と。爾の時世尊、諸の比丘を化して、皆悉く仏の如くならしむ。相好光明、等しくして差異無し。時に耶輸陀羅、即ち指環を以て羅睺羅に與へ、之に語つて言はく、「是、汝が父ならば、此を以て之に與へよ」と。羅睺羅、指環を持ち取りて、直ちに前みて仏に捧ぐ。王及び群臣、咸く皆歡喜して、歎じて言はく、「善い哉。羅睺羅は真に是れ仏子なり」と。

[36-C] 羅睺羅出家の挿話はないが、迦毘羅衛城中の人々が仏の傍らにいる父王や羅睺羅を見て次のように評したことが叙述される。「〔(前略) 不審なり、淨飯王は、竟に此の子を見て〔愛著〕せず。(中略)／愛子羅睺羅は、泣涕し、常に悲しみ恋えるに、見て撫慰の心無し。用って此の道を学ぶ為めなり。(後略)〕」。父王の心から子である仏へのかつての愛執が除かれたように、羅睺羅の心からも父である仏へのかつての愛執が除かれている。

[36-E] 羅睺羅出家に際しては、耶輸陀羅が強く抵抗し、仏が目連を介し度々説

得したことが叙述される。仏は例えば次のような言葉を目連に伝えさせている。「女、愚痴に依て子を愛する事は<sup>しばし</sup>暫の間也。死<sup>しに</sup>て地獄に墮ぬれば母と子と各相知る事無して、永く離れて苦を受<sup>うく</sup>る事無<sup>ひまな</sup>隙し。後に悔<sup>くゆ</sup>るに甲斐無し。羅睺<sup>ろうご</sup>羅道を<sup>かへり</sup>得ては、還<sup>かへり</sup>て母を度して永く生老病死の根本を断て、羅漢<sup>らかん</sup>に成る事を得て我が如くならむ。(後略)」。]

[37-A]「受戒<sup>じえ</sup>韃<sup>た</sup>度」中には叙述を欠くが「房舍<sup>ぼうしゃ</sup>韃<sup>た</sup>度」中に叙述がある。

[38-C]波斯匿王への説法内容として、王道のありよう（「大要は当に慈心にして、民を観ること猶お一子のごとくすべし」）、善悪の因果（「(素より善因を修せざれば、後ちに楽を致すに期無し。既に往いて息む期無し。是の故に当に善を修すべし。自ら省みて悪を為さざれ。自ら作し自ら受くるが故に)」）、世間無常（「是の如く三界を観るに、無常にして主有ること無し。衆苦は常に熾然なり。智者は豈に願い楽しまんや。樹、盛火にて然ゆる如きに、衆鳥豈に群集せん」）、教えの道俗共通（「修道も亦た是の如く、道俗に異方無し。或いは山に居するも罪に墮し、或いは家に在っても仙に昇る」）等が叙述される。なお、王の仏への帰依ののち、王の求めに応じて仏と諸外道との神通力対決が行われ、諸外道が悉く降伏されたことが叙述される。

[39-C]母との対面時の仏および母のありようについて、とくに詳述はない。「母の<sup>ため</sup>に法を説か<sup>ん</sup>が故に、即ち<sup>お</sup>初利天に昇れり。三月、天宮に<sup>あ</sup>廻り、普く諸天人を化せり。母を度して<sup>お</sup>報恩<sup>おん</sup>畢り、<sup>あ</sup>安居の時過ぎて還れり」。

[39-E]仏と対面し、正しく我が子と知った母の喜び、および母と対面した仏の喜びが叙述される。「<sup>ま</sup>摩耶<sup>や</sup>此(自らの乳房から搾り出した乳汁が遙かな仏の口に入ったこと)を見て喜び給<sup>かざり</sup>ふ事無<sup>な</sup>限し。(中略) 仏の、母の<sup>また</sup>来り給<sup>かざり</sup>ふを見給<sup>かざり</sup>ふて、又喜び給<sup>かざり</sup>ふ事無<sup>な</sup>限し」。

ちなみに、この箇所<sup>の</sup>直接の<sup>お</sup>出典と<sup>お</sup>考えられる『<sup>お</sup>釈迦譜』(卷第二・<sup>お</sup>釈迦の<sup>お</sup>母<sup>お</sup>摩訶<sup>お</sup>摩耶<sup>お</sup>夫人の<sup>お</sup>記<sup>お</sup>第十六)における<sup>お</sup>叙述は<sup>お</sup>次の<sup>お</sup>通りである。「時に<sup>お</sup>摩耶、(乳汁の<sup>お</sup>神秘を)見<sup>お</sup>已<sup>お</sup>つて<sup>お</sup>踊躍<sup>お</sup>怡悦<sup>お</sup>すること、花の開<sup>お</sup>榮<sup>お</sup>するが<sup>お</sup>如く、大千<sup>お</sup>世界も<sup>お</sup>普<sup>お</sup>く<sup>お</sup>皆<sup>お</sup>震動<sup>お</sup>し、諸の<sup>お</sup>妙<sup>お</sup>花果、時<sup>お</sup>なら<sup>お</sup>ざるに<sup>お</sup>敷<sup>お</sup>熟<sup>お</sup>す。(中略) 世尊は<sup>お</sup>遙<sup>お</sup>に<sup>お</sup>母の<sup>お</sup>来<sup>お</sup>るを<sup>お</sup>見、須弥<sup>お</sup>山の<sup>お</sup>鼓<sup>お</sup>動<sup>お</sup>する<sup>お</sup>如<sup>お</sup>き<sup>お</sup>相<sup>お</sup>もて、便<sup>お</sup>ち<sup>お</sup>梵<sup>お</sup>音を<sup>お</sup>以<sup>お</sup>て<sup>お</sup>母<sup>お</sup>に<sup>お</sup>白<sup>お</sup>して<sup>お</sup>言<sup>お</sup>は<sup>お</sup>く、「身<sup>お</sup>所<sup>お</sup>經<sup>お</sup>の<sup>お</sup>所<sup>お</sup>は、苦<sup>お</sup>と<sup>お</sup>樂<sup>お</sup>と<sup>お</sup>俱<sup>お</sup>なり、当<sup>お</sup>に<sup>お</sup>涅<sup>お</sup>槃<sup>お</sup>を<sup>お</sup>修<sup>お</sup>して、永<sup>お</sup>に<sup>お</sup>苦<sup>お</sup>樂<sup>お</sup>を<sup>お</sup>離<sup>お</sup>るべし」と)\*<sup>18</sup>。

[40-A]「受戒<sup>じえ</sup>韃<sup>た</sup>度」中には叙述を欠くが「比丘<sup>びくし</sup>尼<sup>に</sup>韃<sup>た</sup>度」中に叙述がある。

[41-C]鴛鴦<sup>うんぐわ</sup>摩羅<sup>まら</sup>に関する<sup>お</sup>詳<sup>お</sup>述<sup>お</sup>は<sup>お</sup>ない。「央<sup>お</sup>瞿<sup>お</sup>利<sup>お</sup>摩<sup>お</sup>羅<sup>お</sup>は、彼<sup>お</sup>の<sup>お</sup>脩<sup>お</sup>伴<sup>お</sup>村<sup>お</sup>に<sup>お</sup>於<sup>お</sup>いて、<sup>お</sup>為<sup>お</sup>めに<sup>お</sup>神<sup>お</sup>通<sup>お</sup>力<sup>お</sup>を<sup>お</sup>現<sup>お</sup>わし、化<sup>お</sup>して<sup>お</sup>即<sup>お</sup>ち<sup>お</sup>調<sup>お</sup>伏<sup>お</sup>せしむ」。

[43-A]「受戒糖度」中には叙述を欠くが「僧残」中に叙述がある。

[43-C]提婆達多の破僧・悪行は次のように叙述される。「爾の時、提婆達は、仏徳の殊勝なるを見て、内心、嫉妬を懷き、諸禪定を退失し、諸もろの悪方便を造り、正法僧を破壊せり。／耆闍崛山に登り、石を崩し以て仏を打てり。石分かれて二分と為り、仏の左右に墮せり。／王の平直路に於いて、狂醉せる悪象を放てば、震え吼えて雷霆の若く、勇氣奮って雲と成る。横に泄れて奔走し、逸越して暴風の如し。／鼻牙尾四足に、触れば則ち摧げざる莫く、王舎城の巷路に、狼藉し、人を殺傷せり。尸を横たえて路に布き、髓脳血は流離せり」。仏はこの酔象に対面し、「〔(前略) 汝は今日、当に貪・恚・癡を捨つべし。已に苦の淤泥に没す。捨てざれば更に深きに転ず』」と説法してその酔いをさまし、心を悟りに導いたとされる。

[43-E]提婆達多の破僧・悪行として、教団分裂を凶ったこと、大石・毒により仏を害しようとしたこと、阿闍世に教唆し仏を害するべく酔象を放たせたこと、阿羅漢の比丘尼を打ち殺したこと（I-10）、阿闍世に父王殺しを教唆したこと（Ⅲ-27）が挙げられている。なお、酔象については仏が神通力をもって退散させたことが叙述される。「仏の御手より五師子の頭を出し給ふに、酔象此を見て逃去ぬ」。

[44-C]阿闍世の父王殺しに関しては叙述がない。「阿闍世大王は、仏の酔象を降すを見て、心に奇特の想を生じ、歡喜して倍して敬を増せり」とある。

[44-E]阿闍世が酔象を放った時は「仏阿闍世王の宮に入て法を説て教化し給て、王の供養を受け給ふ」（I-10）、阿闍世が父王殺しの罪を悔い仏を訪れた時は「仏王を見給て、「彼は大王阿闍世か」と問給ふに、即ち果を証して授記を蒙れり。仏の宣はく、「若し我れ汝を道に不入ずは、不可有ず。今汝ぢ、我が許に来れり。既に仏道に入つ」と」と叙述される（Ⅲ-27）。

[49-C]入滅間際、諸力士（末羅国の人々）に対する説法において、不放逸が説かれる。「〔(前略) 心を撰し、放逸なる莫かれ。精勤して正業を修せ。人は世間に生まれ、長夜、衆苦迫り、擾動して自ら安んぜず。猶お風中の燈の若し」。諸弟子への遺誡の最後も「〔(前略) 汝等善く自ら護り、放逸を生ずる勿かれ。有者は悉く滅に歸し、我れ今、涅槃に入る。言語、是れより断つ。此れは則ち最後の教えなり』」と結ばれたことが叙述される。

[49-E]入滅間際、羅睺羅との対面を待望し、羅睺羅を諸仏に託して入滅したことが叙述される。「〔(前略) 仏羅睺羅を見給て宣はく、「我れは今今滅度を取るべし。永く此の界を隔てゝむとす。汝ぢ我れを見む事只今也。近く来れ」



と宣へば、羅睺羅涙に溺れて参りたるに、仏羅睺羅の手を捕へ給て宣はく、「此の羅睺羅は此れ我が子也。十方の仏、此れを哀愍し給へ」と契り給て、滅度し給ひぬ。此れ最後の言也」。

[50-C] 禪定に入り、そのまま入滅したことが叙述される。九正受を次第す（初禪→二禪→三禪→四禪→空無辺処→識無辺処→無所有処→非想非非想処→滅尽定）→逆に次第に正受す（滅尽定→非想非非想処→無所有処→識無辺処→空無辺処→四禪→三禪→二禪→初禪）→四禪（初禪→二禪→三禪→四禪）。「出定心は寄ること無く、便ち涅槃に入れり」。

[50-E] 阿難に対し、葬儀に関する指示を与えて入滅したとされ、禪定に関する叙述はない。

[51-C] 滅後の仏に関する神秘として、大迦葉の到来・敬礼を待って荼毘の火が初めて燃えたことが叙述される。「火を以て其の下に焼く。三たび焼いて燃えず。／時に彼の大迦葉は、先に王舎城に住し、仏の涅槃するを知り、眷属は彼れに従って来たる。／淨心にて妙願を發し、世尊の身に見えんと願う。彼の誠願を以ての故に、火滅して燃えず。／迦葉と眷属至り、悲歎し俱に顔を瞻て、双足を敬礼せり。然る後ちに火は乃ち燃ゆ」。

[51-E] 滅後の仏に関する神秘として、遅れて来た迦葉が対面を願った時、棺から両足を出し礼拝を受けたこと、忉利天から母が降った時、棺から身を起こして対面したこと、荼毘の火がつかなかった時、自らの内より火を出し、身を焼いたことが叙述される。

## おわりに

他の仏伝テキストとの対照も踏まえ、『今昔物語集』が描く仏の特質を探究することは今後の課題である。ここでは若干の覚え書を記すにとどめる。

### ○出生前

・黒部が指摘するように<sup>\*19</sup>、多くの仏伝は燃灯仏授記（仏統譜）もしくは王統譜を起点とするのに対し、『今昔物語集』巻第一第一話の標題は「釈迦如来、人界に宿り給へること」であり、降兜率・託胎が起点となっている。

・出生から入滅に至る仏の生涯全体を語る点で『仏所行讚』『今昔物語集』は共通するが、前者は過去生を語らず、後者は入滅以後まで語った後、天竺部最終巻において過去生を語る。一方では『仏所行讚』との対比において、他方では仏としての生涯を語らず、もっぱら過去生のみを語る先行仏法説話集『三宝

絵』との対比において、『今昔物語集』の特質を問う必要がある。

- ・『今昔物語集』が語る菩薩行の具体的内容について、多くの菩薩行を列挙する『方廣大莊嚴經』や、先行仏法説話集『三宝絵』との対比が必要である。
- ・仏統譜は語られないものの、『今昔物語集』中には幾人かの過去仏の名が見える。諸人過去生の因縁を語る釈迦仏によって言及される場合がほとんどである（燃灯仏（Ⅰ-17）、宝蓋灯王仏（Ⅲ-19）、毘婆尸仏（Ⅱ-8, 9, 10, 12, 13, 15, 17, 19, 20, 24, 35）、拘留孫仏（Ⅱ-36）、迦葉仏（Ⅰ-8, Ⅱ-11, 17, 18, 27, 30, 34, 40, 41, Ⅳ-29））。

### ○出生～成道

- ・『四分律』を除き、いずれのテキストにおいても出生時の即行七歩、出生宣言の叙述がある。
- ・出生後間もなくの生母との死別について、愛別離苦の最たるものとして後年仏が言及するテキストもある（[08-C] [14-D] 参照）。『今昔物語集』にその言及はないが、成道後の忉利天における説法の挿話が、生母との再会の喜びを語る。入滅後の仏と生母との対面の挿話も、生母に対する仏の孝養を示している（Ⅲ-33）。
- ・出家に対する父王の深い悲歎はどのテキストにおいても叙述される。
- ・閻浮樹下の禅定、四門出遊、あるいは出家宣言において、菩薩自身の苦と他者・一切衆生の苦はともに意識されるが、『今昔物語集』においてはとくに他者・一切衆生の苦に対する意識が目立つ。
- ・成道に関する『今昔物語集』の叙述は簡略であり、教説内容に立ち入らない。
- ・成道後の解脱三昧の楽しみに関して『今昔物語集』は叙述を欠く。

### ○説法教化

- ・梵天勧請に関する『今昔物語集』の叙述は簡略であり、法の説き難さ、解し難さへの言及はない。
- ・初転法輪に関する『今昔物語集』の叙述は簡略であり、教説内容にほとんど立ち入らない。
- ・『今昔物語集』においては、耶舎出家や三迦葉・目連・大迦葉婦仏は語られないが、釈種出家に続く諸人出家・供養の説話は多い（Ⅰ-22～38）。また、父母教化に続く諸人過去生の因縁物語（Ⅱ-8～41）、入滅に先立つ衆生救済（Ⅲ-7～12, 14～27）に関し、多くの説話が載録されている。

○入滅・入滅後

- ・入滅間際の仏の遺言について、『仏所行讃』が不放逸の教えとするのに対し、『今昔物語集』は羅睺羅への加護祈念の言葉とする。
- ・仏の入滅を見るに忍びなく逃避した羅睺羅が他土仏に直面し、入滅間際の仏が羅睺羅への加護を十方諸仏に祈念するなど、『今昔物語集』では現在他土仏への言及が見られる。
- ・『今昔物語集』において、未来仏の出現が仏自身により言及されている（Ⅲ-8。未来仏の固有名は示されない）。仏滅後のいくつかの説話では、未来仏としての弥勒菩薩の名が見える（Ⅳ-19, 26, 27, 28, 39）。阿弥陀仏関連説話も仏滅後を語る巻第四に載録される（Ⅳ-36, 37）。

- 
- \* 1 本田義憲「今昔物語集仏伝の研究」『叙説』第11号、奈良女子大学文学部国語国文学研究室、1985年、「まえがき」参照。
  - \* 2 今野達『今昔物語集一』新日本古典文学大系、岩波書店、1999年、「付録」（出典考証の栞）および「解説」（七、素材について）参照。
  - \* 3 本田義憲前掲論文（注1）参照。
  - \* 4 黒部通善『日本仏伝文学の研究』和泉書院、1989年、「第三章 『今昔物語集』における仏伝説話」pp.80-120、参照。
  - \* 5 『国訳大蔵経 経部第十三巻』、第一書房、1975年、pp.4-12、参照。
  - \* 6 石上善應『仏所行讃』仏典講座5、大蔵出版、1993年、pp.36-44、参照。
  - \* 7 平井宥慶・大南龍昇『新国訳大蔵経② 本縁部1』、大蔵出版、2002年、pp.22-41、参照。
  - \* 8 奈良康明・下田正弘編『仏典からみた仏教世界』東アジア仏教史03インドⅢ、佼成出版社、2010年、pp.18-20、参照。なお、平岡による整理は次の岡野の分類に基づく。岡野潔『インド仏教文学研究史』（電子版）<http://member.nifty.ne.jp/OKANOKIYOSHI/>（現在は<http://homepage3.nifty.com/indology/>に移行）、1998年。
  - \* 9 常盤大定前掲書（注5）p.9、による。
  - \* 10 平井宥慶前掲書（注7）pp.31-37、による。
  - \* 11 平岡聡前掲論文（注8）pp.18-20、による。ただし、チベット文・訳のテキストについては略した。
  - \* 12 境野黄洋訳・竹村牧男校訂『四分律』巻の第三十一「受戒羯度の一」～巻の第三十五「受戒羯度の五」（『国訳一切経印度撰述部 律部二』『同

- 律部三』大東出版社、1929～1930年)。
- \*13 常盤大定訳・丸山孝雄校訂『方広大莊嚴經』（『国訳一切經印度撰述部 本縁部九』大東出版社、1930年）。
  - \*14 大南龍昇校註『仏所行讃』（平井宥慶・大南龍昇『新国訳大蔵經② 本縁部1』、大蔵出版、2002年）。
  - \*15 常盤大定訳『国訳過去現在因果經』（『国訳大蔵經 経部第十一卷』第一書房、1975年）。
  - \*16 注2に挙げた新日本古典文学大系本による。なお、本文引用に際しては片仮名を平仮名に改めた。
  - \*17 諸々の仏伝テキストにおける載録挿話の要覧として、次のものがある。森章司・本澤綱夫・岩井昌悟「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（中央学術研究所「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」HPより、【資料集3】「中央学術研究所紀要」モノグラフ篇 No.3、<http://www.sakya-muni.jp/monograph/03/3-1/>）。また、平岡聡『法華経成立の新解釈 仏伝として法華経を読み解く』（大蔵出版、2012年）「第二章 仏伝の考察」にも、仏伝内容を10項挙げ、その載録有無について20テキストを比較対照した表がある。
  - \*18 蓮澤成淳訳・佐々木孝憲校訂『釈迦譜』（『国訳一切經和漢撰述部 史伝部六』大東出版社、1936年初版、1989年改訂第二刷）。
  - \*19 黒部前掲書、pp.95-98、参照。